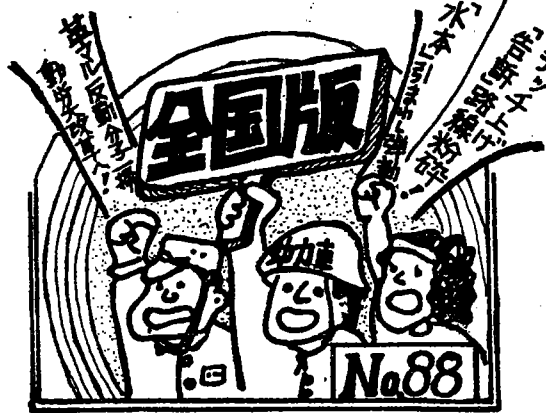


「本部」反動分子の告訴路線を粉碎し 動労大改革へ総決起しよう!



全国の動労組合員のみならず、第三七回全国大会を前に、「本部」反動分子の路線的・組織的破壊は、ますます鮮明となっております。

第一に、動労千葉組合員へのデッチあげ告訴にみられる、労働者としての感性を自ら放棄した権力直通の実態をますます強め、第二に、国鉄三五万人体制攻撃を、自らがセク特的に生きのびるためだけに権力・当局のいうまま認め、職場と労働条件を売り渡し、第三に、その結果として組織人員が三万人台に転落することになすすべもなく、実質的組合費の値上げをもって、さらに組合員の負担を強要し、「水本」運動などのセクト運動を強化しようとしている点に「本部」反動分子の狙いがあることは、第三七回全国大会の運動方針を見れば一目より然です。

明白となった動労千葉の勝利と 「本部」反動分子の行きづまり

このような「本部」反動分子の腐敗・墮落を最も端的に示すものとして、東洋大出身の革マル分子・嶋田誠をコロビ屋に仕立てあげた動労千葉組合員に対する「6・12事件」デッチあげ告訴問題があります。

このデッチあげ告訴問題の本質は、この間の動労千葉独立に関する組織争闘戦において、動労千葉が完全に勝利し、「本部」反動分子が敗北したということ。彼ら自身はつきりと自認したという事です。数億の組合費を投入し、大量オルグを投入し、4・17津田沼事件を頂点とする殺人暴力をもってしても動労千葉の組織破壊ができず、三月ジェット決戦ストでのスト破り、当局に泣きついでに処分弾圧要請、等々：ありとあらゆる破壊策動をくりひろげたにもかかわらずことごとく失敗に帰し、ついに権力の力をかりてしか動労千葉と対決できないところまで、「本部」反動分子は追い込まれてしまったのです。

労働者として、また、労働組合としてあるならば決してできないこと—まさに自殺行為ともいえるべきデッチあげをもってする権力への泣きつき告訴以外にうつつ手もなくたってしまった、腐敗・墮落、惨敗の「本部」反動分子を、今こそ動労から一掃しなければなりません。

「またも引のばし」 II 「千葉問題の結着」

第三七回全国大会方針書によれば、「次期中央委員会までに千葉問題の決着をつける」となっています。

前回中央委員会で、「第三七回全国大会までに

81.7.5
全国版
No. 88

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五六(八巻)電話三三二七二〇七

千葉問題の結着をつける」と確認し、八畝および山下庄一郎(デッチあげ「地本」委員長)名で、「六月二〇日までに復帰しないと権利を失う」といふ誰にも相手にされない親書を家庭送付し、全国大会への手みやげとばかりに銚子支部破壊・分裂II「業務再開」路線の強行までやっておきながら、またも再々度引きのばさざるを得ないところに、何よりも鮮明に、誰が見てもわかる形で、「本部」反動分子の破産とゆきづまりが突き出されているのです。

いかに反動分子が尻をたたくことが、「総評も動労もみんな右へ行こうとしているのに、なんで動労千葉だけが左へ行かなければならないのだ」という意識で、当局との交渉も満足にできないまま、とにかく酒の匂いにする方へばかり行きたがる落ちこぼれのグウタラ分子II土屋一派に、労働運動をまともに実践することなどできるはずがないのです。

10年前の鉄労よりも 醜悪な「告訴路線」

第三七回全国大会方針によれば、このような労働組合ならざる百名足らずのおちこぼれ集団に、今後三年間、毎年二千万円の組合費を投入することとなっている。人件費も含めれば五、六千万円にも達する組合費のむだ使いです。

このような状況に絶望した「本部」反動分子が、ついにふりかまわずその本性をさらけ出したのが、今回の「6・12集団暴行・傷害事件」なる全くのデッチあげをもっての、権力へのタレコミ告訴II動労千葉への権力のデッチあげ弾圧を導入し、たのみ込むという、驚くべき反動的・反労働者的暴挙にほかなりません。

(裏に続く)